

陶遊

2006年2月1日発行第503号増刊
昭和45年7月26日第3種郵便物認可
盆栽世界2月号増刊

74 2006 February

あなたもできる陶芸誌

【特集】わが家のかわいい姫たち

おひなさま

ハウツー

抱き雛・タタラ雛・麗院宝雛

教室

手づくりのバレンタイン
梅干し壺をつくらう



失敗、それでも唐津を焼く

唐津の二度焼に挑戦（虚空窯）

平成16年の12月に、虚空窯で唐津を焼いたことはかつて報告しました。

うまく焼けた作品もありましたが、へたったもの、釉薬が熔けきれていなかったものなどがかなりあり、全体としては失敗に近かったといつてよいでしょう。そこで平成17年の4月に再度、唐津を焼くことにしました。

虚空窯としては6回目の窯焚きになります。

平成16年末の唐津焼成をしたときの反省点は以下のとおりです。

- 1、窯を1200℃以上にすることは、十分に乾燥した松が必要となる。
- 2、熾の掻き出しは少しずつ、薪をくべるときも少しずつ丁寧にする。
- 3、穴窯の温度差はかなり大きい。短時間で焼き上げる時はその影響がかなりのもの。

対策として窯の温度調節を厳格

に行い、窯全体の温度を上げるために1100℃以上保持の時間を増やす。誰が行っても失敗しない

よう薪をくべる手順書を作り、ゼーゲルコーンを設置することになりました。

4、程度の差はあれ、穴窯は温度差が避けられない。

対策として、後ろのほうの作品の釉薬は低温度で熔ける釉薬にすることにした。

5、唐津と赤土ブレンドの作品の色合いは少し濃い。

対策として唐津単味で成形し、唐津と白土のブレンドで成形することにした。

平成16年12月の焼成はどちらかといえばへたったものが多かったので、4月の焼成は温度を上げすぎないことに注意しました。

失敗した第2回目の唐津（第6回目の焼成）は、平成17年4月29

日から4月30日にかけて行いました（昇温カーブと温度は左ページ参照）。

結果は唐津釉や長石釉が熔けて、作品として通用するのは第一列の上の方のみでした。ほとんどの作品は焼きが甘いか、釉薬がまったく熔けていない状態（75〜76ページの写真参照）で、全体として90%が未熔融に近い状態となつてしまいました。

温度曲線を見ていただくと分かるのですが、12月のときと比較して温度の上がつている時間が短いのです。温度を上げすぎないように考えたのですが、結果として上がらなかったことが歴然となっております。

このときほど落胆したことはありませんでした。しかし、虚空窯をつくった「酒と女と陶芸を愛する会」の男性陣は、この程度のことであきらめません。もう一度や

ろうということになりました。「酒と男と陶芸を愛する会」の女性陣もめげずに今度に期待しますということになりました。

何とか焼けた10%程度の作品の中にはちよつとよい抹茶茶碗がありました。もう少し温度を上げると釉薬の流れが均一になって面白みがなくなるものです。このような作品は、今回のような条件でないと作れないものなのかもしれません。

さて、12月の反省点に加えるべきことは温度を上げすぎないで、一定に長時間保つことです。穴窯の温度分布はかなりあるのですが、温度を一定に長時間保つことで温度差は少なくなります。

第7回目の9月の焼成の目標は1225℃から1245℃の間で長時間保つことです。

また、唐津だけでなく志野や織部も入れました。どのような風合



唐津の二度焼の窯出し風景

いになるか楽しみです。

反省はしても道楽はやめられない

去年の12月の焼成のときも今年の4月の時も、酒を飲んでかなり楽しんだことは事実です。

どんちゃん騒ぎこそありませんでした、がそのため窯の見張りが少しおろそかになったのではないかと危惧したのですが、今回も宴会部長ははりきっていました。というより誰も反対しませんでした。陶芸も酒も大切な人生です。楽しんで、



しかも見事に成功させるまで決してめげないというアマチュア魂は健在です。

ちょうど、窯焚きの最中に中秋の名月を見ることができるということで、それを楽しみに虚空窯の焼成を行いました。

窯の火入れ

今回の火入れは9月17日の午前8時に行いました。昇温カーブをあらかじめ設定して、それに合わせて温度管理を行うことは前回と同じです。薪を入れれば簡単に温度はあがりますが、あせらず、じっくりと決められた温度設定になるように心がけました。

最初は桜や榎の木をくべて、最後の1100℃以上に松を使う予定でしたが、なぜか400℃近辺で温度が上がりにくくなったので、この時点から松も少し投入してみました。

窯をなるべく出さないという考えは徹底しました。1100℃までは、まったく窯を出さず、薪がなくなるとくべるという作業を続けました。飲み会は、まだ人が多くいるときに担当でない人が楽しむことにしていました。

中秋の名月と月見酒

虚空窯がある場所は窪地になっていて、まわりは木立に囲まれています。

9月18日は中秋の名月でした。忙しい都会人は月を愛でる時間などほとんどありませんが、千葉の印西や白井の近くにはまだ自然の里山などが多く残っています。現代の日本人より日本人らしいC・W・ニコルさんもこの近くに住んでおられて自然を愛していると記憶しています。

それはさておき、このときばかりはお月見をしようということになり、穴窯で焼いた花入に、近くの野原でとったススキを挿して、窯の光で深まり行く日本の秋を味わいました。

といつてもすぐに「花より団子」ならぬ「月より酒」になりまして、例のごとく特上の酒を片手に窯番以外は楽しい時間を過ごしていました。白次陶芸教室の男性陣は、会の名「酒と女と陶芸を愛する会」にふさわしく、うまい酒を調達するのが得意なのです。

今回の酒は八海山の純米吟醸と久保田の碧寿でした。ともに新潟のお酒で、1年前の大地震のとき

は大変だったと思いますが、その後我々においしい酒を飲ませて下さることに感謝します。「浴衣のきみは尾花の簪」と、吉田拓郎きどりで妙齢の女性がいなかったことを嘆いていたおじさんがいました。が、おばさんも「どてらの君はすすけたふんどし」と負けずに切り返していました。

たしかに拓郎の「旅の宿」はいい曲です。おそらく彼も我々と同じように中秋の名月を見ながらこの歌を作ったでしょう。我々には拓郎のような才能はありませんが、彼の歌を感じ取り、そしてその思いを器に託すことはできます(ほんとかしら)。

冗談はさておき、秋の酒はじっくりと飲むのがよいものです。更け行く秋の風情と見事な月のアンサンブルは都会では味わえないものです。

坦々とした穴窯焼成

2回の焼成の失敗は、各人をして、きちつと対応することが必要だということを認識させたといえます。慣れてきたこともありすが、今までの焼成と比較して落ちていた焼成でした。約22時間で1

200℃まで上がりましたが、それ以後35時間は1225℃から1245℃に保つことに留意しました。1225℃近くになると薪を窯の前と横から数本投入、そのまま待つという作業が坦々と続きました。約5〜10分ごとに薪を投入する必要があります。

熾はほとんど出ませんでした。還元の場合は熾が溜まりますが、酸化の場合はほとんど溜まりません。そういった意味では楽な焼成です。

徹夜の窯番も、話題は温度と窯内の状態、薪の乾燥状態など、焼成に関わることはかりです。ほとんどの人が3日間の焼成に集中したのが今回の特徴でした。

窯出し

窯出しは9月25日に行いました。多くの作品は釉薬が十分に熔けた状態です。少しへたり気味です。温度が少し高かったためか、火前より後ろのほうの作品がしつかりとしていました。比較的熔けにくい薬灰釉でも熔けすぎで、明らかに思っていたより温度が少し高かったと思われます。

火に近いところは灰を被り、こ

の部分に置いた焼締の作品はいい感じになっています。つまり、焼締の温度として良かったと思われる。事実、焼締の作品を見ますと、信楽を焼成したとき（今回の温度より高く1280℃で焼成）の色より発色がいいと感じます。どうもこの虚空窯は1250〜1260℃あたりの温度が焼締としてよいように思います。1280℃を超えるとよい色は出ないようです。今まではすこし温度を上げすぎていたと思われます。

作品

前回の熔けなかった作品を再度焼成しましたが、多くの作品で十分な焼成、一部十分すぎる焼成となりました。

うまく焼けたといえる作品は、高田さんの小皿（朝鮮唐津）、吉田さんの角皿（長石、吉崎さんの角鉢（朝鮮唐津）で、すこし温度は高目ではありますが、唐津の風合がよく出た作品です（いずれも75〜76ページの写真参照）。

前回まったく熔けなかった増田さんの片口（朝鮮唐津）、同じく兵頭さんの小鉢（朝鮮唐津）もきれいに焼き上がっていました。火前

に置いた焼締の作品は、灰被りの良いものがありました。薪が当たったと思われるものは、割れたりゆがんだりしていました。

今回は還元がほとんどありませんでしたので、思いがけない作品というものはあまりありませんでした。ただ、長石釉、志野、織部が灰釉がまったく同じという状態でした。つまり作品としては、今までの焼締のときの作品で灰が熔けたものと同じです。さすがにこれらの作品を入れた生徒さんは落胆していました。

今回の反省点

今までの経験に加えて今回の反省点をまとめますと、以下のようになります。

- 1、温度はもう少し低くてもよかった。釉薬の場合は最高で1240℃程度。したがって温度の保持は1215℃〜1235℃にするのがよい。
- 2、信楽の焼締の場合は最高温度で1250℃〜1260℃程度。
- 3、穴窯の温度差はかなり大きい。温度保持は10時間程度では全くだめ。温度保持を35時間程度にすればかなり均一になる。

4、織部の緑はほとんど発色しなかったが、銅は飛びやすいのが原因。さやにいられて焼くべきであった。

5、志野は灰釉と同じになったが、これは温度が高すぎたのが原因。

6、その他。穴窯はやはり電気窯と異なる独特の発色がある。焼締ではその事を認識していたが、釉薬をつけても、ものによっては実に味わい深くなる。

今回もこの記事が雑誌に載るころは反省会か、祝勝会か、何か名前をつけて一杯飲む会が開催されると思います。完全に成功したと言えないのが穴窯であることが第5回〜7回の一連の唐津の焼成でよくわかりました。

しかし完全な失敗ありませんでした。90%以上失敗した第6回の焼成でも、いい作品は数点ありました。皆が失敗しているのに、うまく焼けたと喜ぶことはできないのですが、いいものはやはりいるのです。なにか人生に似ている気がします。やりだすとやっぱり止められないというのが陶芸なのです。

報告・菅原誠（虚空窯陶芸教室）

唐津(二度焼) 焼成作品紹介



花器（織部釉） 20×14×28cm 小野泰一



小皿（朝鮮唐津釉） 14×14×3cm 高田奈緒子



角皿（長石釉） 22×14×3cm 吉田和江



二度焼後の片口（内側）



二度焼前の片口（内側）

二度焼を行った作品はいずれも、焼成前の写真でも分かるように、朝鮮唐津釉や長石釉が熔けきらずに終わっていた。また写真左上でも分かるように、織部釉作品などもその本来の特徴が現れない結果となっている。



片口（朝鮮唐津釉） 22×18×15cm 増田久子



絵唐津小鉢（長石釉） 13×13×7cm
白次丈治郎



小鉢（長石釉） 10×10×5cm 石毛 健



小鉢（わら灰釉） 12×12×8cm
吉崎幸孝



角皿（わら灰釉） 23×14×3cm 横野美佐子



角皿（朝鮮唐津釉） 23×14×3cm 小林幸子



写真下の二度焼前



写真上の二度焼前



写真下の二度焼前



写真上の二度焼前



角皿（朝鮮唐津釉） 27×18×2.5cm 白次丈治郎



角皿（朝鮮唐津釉） 30×22×3cm 白次丈治郎